

あたら ぼりかわ ほ
新しく堀川が掘られ、
すいじょう ゆ そう だいてうみやく
水上輸送の大動脈に
なりました

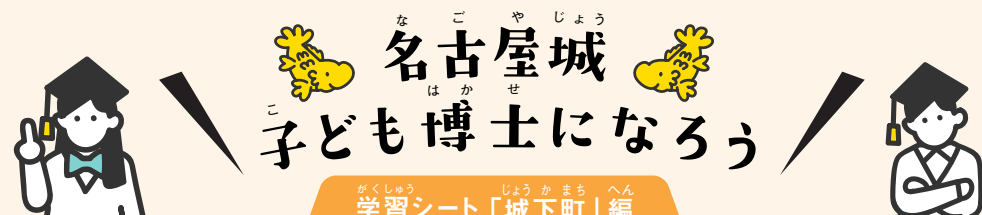


ていました。

ちくじょうご ぼりかわ ぞ すいうん み の じ
築城後は、堀川沿いに水運や美濃路
りょう こめ しお さけ ざいもく
を利用する米、塩、みそ、酒、材木などを
あつか しょうにん しょうにん あつ え ど じだい つう
扱う商人や職人が集まり、江戸時代を通
な ご や しょうぎょう ちゅうしん
じて名古屋の商業の中心になりました。



きょうほうじゅうよねんとりどしなごやえず
「享保十四年酉年名古屋絵図」より作成
いじょう はし おとうばし くら
※以上の6橋に尾頭橋を加え、
「堀川七橋」と呼ばれた。



がくしゅう しょうか まち へん
学習シート「城下町」編

— 名古屋の城下町は、どのようにつくられたのでしょうか —

きよす ごし よ
「清須越」と呼ばれる
まち
町ぐるみの
ひ こ はし
引っ越しが始まりました

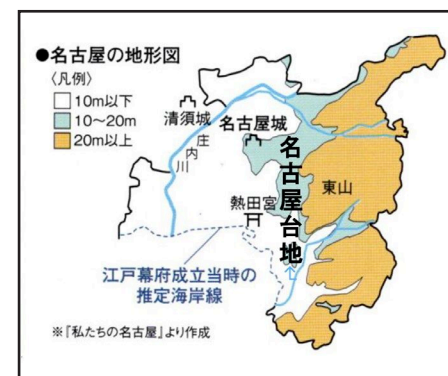


せきがはら たか ねん けいしゅう
関ヶ原の戦いのあと、1610年(慶長1
5)、徳川家康は、西方への備えと東海
どう まも みず ぜ すいがい しん
道の守りかねて、水攻めや水害の心
ばい だいち あつた みなと ちか
配がない台地で、熱田の港にも近く、
とうざい つう な ご や ちくじょう かいし
東西に通じた名古屋に築城を開始しま
した。そして、城の普請と合わせて、こ
れまで尾張国の中心だった清須から、
まち な ご や うつ きよす ごし はし
町ごと名古屋へ移す「清須越」が始ま
りました。

きよす ごし ちくじょうかんけいしゃ
「清須越」では、まず、築城関係者を
ぶ し かな てつほう しょくにん ひ こ
はじめ武士、刀や鉄砲の職人が引っ越
はし じしや ちやうにん こ ふく
しを始め、寺社や町人はもとより、呉服
しょう こめ や しお や かわら や しょうか しち
商、米屋、塩屋、瓦屋などの商家、質
や までも新しい城下に移りました。さら
には、橋まで引っ越しました。

きよす ごし な ご やじょう かんせい よく
「清須越」は名古屋城が完成した翌
ねん かんりょう
年に、ほぼ完了したといわれています。

きよす ごし とうじ うす ひ うた
「清須越」のあと、当時の臼挽き唄に
おも な ご や はな
「思いがけない名古屋ができて、花の
きよす の
清須は野となろう。」などと歌われました。



きよす うつ まち
【清須から移された町】
ほんまち おおつ まち い せ まち ちやうじやまち
本町、大津町、伊勢町、長者町、

てん まちやう なべや ちやう
伝馬町、鍋屋町など

きよす うつ じしや
【清須から移された寺社】
そうけん じ ちやうえい じ せいしゅう じ ほつ け じ
総見寺、長栄寺、政秀寺、法華寺、
がんしゅう じ あきひ じんじや
含笑寺、朝日神社など

きよす うつ はし
【清須から移された橋】
ごじやうばし てん まばし
五条橋、伝馬橋

げんざい ごじやうばし ぎ ぼ し な ご やじょうそう
※現在、五条橋の擬宝珠が名古屋城総
ごう じ むしよ しょう
合事務所に所蔵されています。

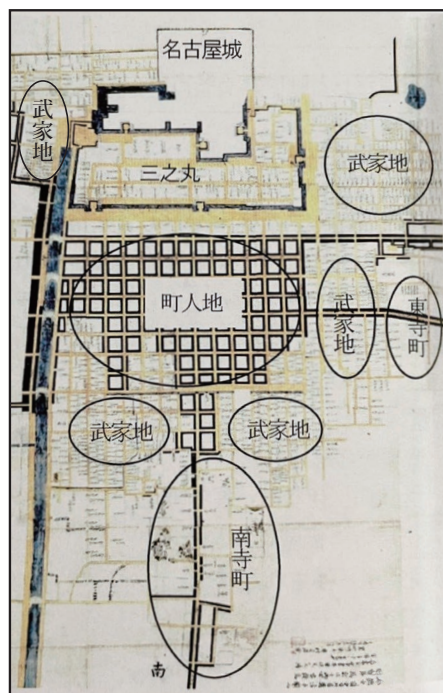
城下町は武家地・町人地・寺社地に分けられました

城下町は、武家地、町人地、寺社地の三つに大きく分けられました。中でも、町人地は、一等地ともいえる三之丸の南に配置され、東西11区画、南北9区画の「碁盤割り」に区切られました。名古屋の城下町の「碁盤割り」は、一つの区画の一边が約100メートルに定められ、正方形になっていました。区画内は、多くの町家が建てられるよう、間口を狭くして、奥行きのある町家が設計されました。

武家地は、身分によって分けられ、三之丸には成瀬家や竹腰家をはじめ、尾張藩の重臣たちの屋敷が置かれました。さらに、城の東側に中級以下の武家地が設定されました。白壁町、ちからまち、しゅもくちょう、しろ、ひがしもん、つつ主税町、撞木町など、城の東門に続く通り、両側に、城の近い方から石高によって割り振られました。そして、「碁盤割り」の周辺には、町人地を囲むように山口、小林、広井、巾下などの地域に分散して中級・下級の武士が配置されました。

寺社地は、城の防衛を兼ねて、城下

町の南と東に置かれ、宗派ごとに集められた寺院で二つの寺町がつくられました。一つは「南寺町」と呼ばれ、本町通りに沿って城下町の南の入り口近くに、万松寺、総見寺、長福寺（七ツ寺）など、広い敷地を持った寺院のほか、臨済宗、曹洞宗、浄土宗の寺院が集められました。もう一か所は「東寺町」と呼ばれ、岡崎街道に沿った城下町の東北9区画の「碁盤割り」に区切られました。南の入り口あたりに、法華寺や含笑寺など、曹洞宗と日蓮宗をはじめとする大小の寺院が置かれました。

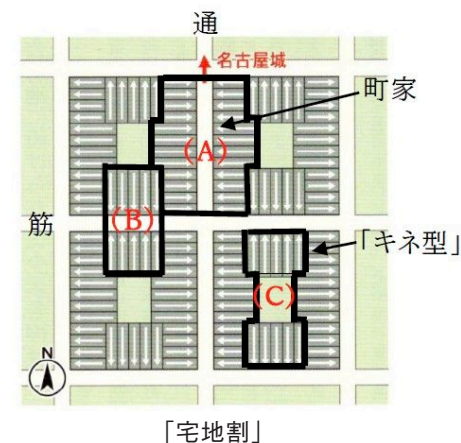


「万治年間名古屋絵図」より作成

一つの区画は正方形で、宅地割は「キネ型」になっていました

町人地の中心部は、1区画が正方形になっていて、すべての町家の出入り口が、通や筋に面して配置され、向かい合った町家で一つの町(A)(B)がつくられていました。区画の真ん中にできた空き地(C)は、寺社が置かれたり、共有地として使われたりしました。宅地割は形が杵に似ていることから「キネ

型」と呼ばれています。また、真ん中の空き地は「会所」といい、名古屋では「閑所」と呼んでいました。



城下町の中心「札ノ辻」から街道が東西南北に伸びていました

本町通と伝馬町筋が交差する場所は「札ノ辻」と呼ばれ、城下町の中心になっていました。また、ここは、南から西北に向かう「美濃路」、北に向かう「木曾街道(上街道)」、東南に向かう「岡崎街道(駿河街道・飯田街道)」など、主な街道の起点にもなっていました。辻の西南角には伝馬会所(荷物を運ぶ人足や馬を用意する所)、西北角には飛脚会所が置かれていました。また、

東南角には高札場が設けられ、幕府や藩の掟などが書かれた高札(木製の立て札)が立てられていました。

